

中央アフリカ熱帯雨林の狩猟採集民バカ におけるバナナ栽培の受容

北 西 功 一

The Acceptance of Banana Cultivation among the Baka
Hunter-gatherers in Tropical Rainforest of Central Africa

Koichi KITANISHI

(Received September 27, 2002)

1. はじめに

バカは一般に「ピグミー」と呼ばれる中央アフリカ熱帯雨林地域に居住するエスニック・グループの1つである。ピグミーはこの熱帯雨林地域の先住民と考えられ、狩猟採集を主とした生業活動を近年までおこなっていた。現在のピグミーの生活、特にその経済的な側面は、地域によってかなりばらつきが存在するが (Bahuchet, 1985; 市川, 1991; Kitanishi, 1995)、ここ数十年から100年にわたって急激な変化を遂げてきた。その主な原因としては、植民地期に端を発する国家による支配や定住化・農耕化政策、市場経済の浸透などがあげられる (Wilkie & Curran, 1993)。本稿で取り上げるカメルーン南東部に居住するバカにおいても例外ではない。

バカは植民地政府および独立後の政府による定住化・農耕化政策の流れの中で農耕を受け入れ、現在では彼ら自身の畑を持ち、自発的に農耕をおこなうようになった。しかし、彼らの農耕に関する調査の過程で、彼らがおこなっている農耕は近隣の農耕民がおこなっている農耕といくつかの面で違いがあることや、もともと彼らがおこなっていた狩猟採集という生業活動が持つ性格を一部残した農耕であることが明らかになってきた。

バカは近隣の農耕民の農作業の手伝いをおこなうことにより、かなり以前から農耕の技術を知っていたと思われる。しかし、手伝いは農耕民の指示に従っておこなうだけであり、彼ら自身の畑を持って、彼ら自身が計画を立てて農耕をおこなうようになってからは40年程度しか経過していない。さらに、バカは定住集落の周りで狩猟採集活動をおこなうとともに、時には数週間から1、2ヶ月間森に滞在して狩猟採集活動をおこなうこともある。

狩猟採集と農耕の間には多くの面で違いが見られる。その中で本稿において取り上げるのは、狩猟採集は一日が生産および消費の単位であることが多い生業形態であるが、農耕は数ヶ月か

ら数年が生産の単位となる生業形態であるという点である。狩猟採集から農耕へと主要な生業活動が変化すれば、生活が一日単位から数ヶ月、数年単位に変化するはずである。本稿では、生産の時間的な単位の相違が、彼らの受け入れた農耕が持つ性質にどのような影響を与えたのかということ进行分析したい。また、バカの農耕において、バナナという作物の果たした役割は非常に大きい。これはバナナという作物の持つ性質が、矛盾した言葉ではあるが、「狩猟採集民による農耕」に適していたためであり、これについても考察する。

バカがどのような形で農耕を受け入れることができたのかということを知ることは、人類が農耕を発明もしくは受け入れていった状況を理解する上でのヒントとなるかもしれない。この点については最後に考えてみたい。

2. 調査地とそこに住む人々

ピグミーは先ほど述べたように中央アフリカ熱帯雨林地帯の先住民と考えられている¹⁾。この地域には紀元前1,000年頃からバントゥ系²⁾と呼ばれる人々が進出し始め、遅くとも紀元1世紀までにはコンゴ盆地のほぼ全域に分布を拡大している(市川, 1999)。その過程でピグミーの多くは追いやられたり、バントゥ系の人々に同化したり吸収されたりしてしまったと思われるが、一部は集団として狩猟採集の生活を維持した形で近年まで残った。現在、そのような人たちが点々と中央アフリカ熱帯雨林地帯に存在している。

農耕民との接触以降、ピグミーは農耕民からまったく独立して暮らしていたわけではないだろう。逆に、経済・社会的に非常に密接なつながりを持ちながら生活してきたと考えられている(Bahuchet & Guillaume, 1979)。その証拠の1つとしてあげられるのが言語で、現在各地のピグミーが話している言語はいずれもが農耕民起源のものである(Bahuchet, 1992)。

バカはそのピグミーの1グループである。バカはカメルーン南東部とコンゴ共和国北西部に3-4万人程度居住していると推定されている(Joiris, 1993)。彼らはウバンギアン(Oubanguian)系の言語を使用している(Bahuchet, 1992)。カメルーン南東部にはバカに加えてバントゥ系のバペレ(Bakpele)、コナベンベ(Konabembe)、ボマン(Mboman)やウバンギアン系の言語を話すバンガンド(Bangando)の人々が存在する。

ここで、カメルーン南東部のバカ全般の農耕に関する歴史について述べよう。1950年代以前、バカは近隣の農耕民とかかわりを持ち、農作業の手伝いをしたり、森の産物を交換したりする一方で、一年のうちある程度は森の野生動植物に多くを依存し、数週間もしくは数ヶ月ごとにキャンプを移動するといった生活を送っていたと考えられる。

その後、1950年代からバカの生業活動は大きく変化し始める(Althabe, 1965)。植民地政府および独立後の政府はバカに対して定住化政策をとった³⁾。それ以前においても、農耕民の農作業を手伝い、農作物を見返りとしてもらうということはあったが、定住化によってバカの農作物に対する依存度は大きくなったと考えられる。これは、定住化によって農耕民と接触する

機会が増えるとともに、定住集落のまわりの野生動植物資源を採り尽くしてしまうことによって狩猟採集活動の生産性は落ちたと思われるためである。他方、近隣の農耕民はカカオとコーヒーを換金作物として栽培することを政府によって奨励され、その畑で働くバカも出てきた。

定住化に加えて、政府はバカに彼ら自身の畑を保有し彼ら自身で農耕することを勧めた（もしくは強要した?）。その結果、次第に自分の畑で農耕をおこなうバカが増えてきた。現在、定住集落において最も重要な食料源は彼ら自身の畑から収穫される農作物である。栽培されている農作物には自給用のものばかりではなく、カカオやコーヒーなどの商品作物も見られる。

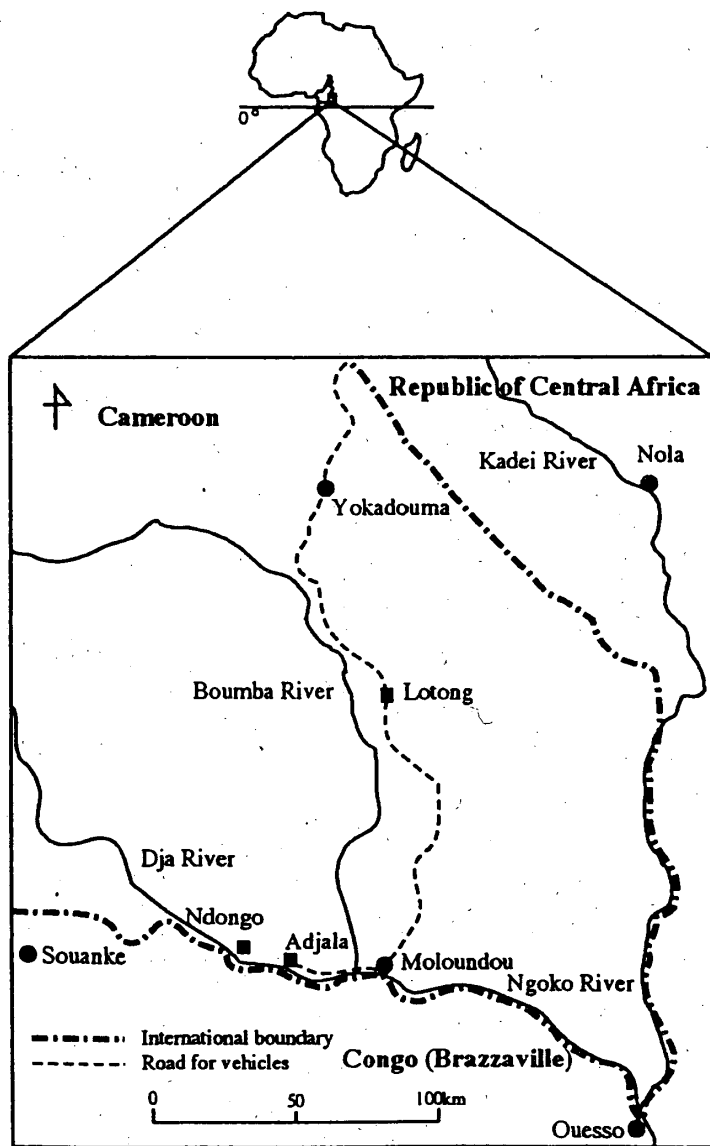


図1 調査地

私はカメルーン共和国東部州ブンバ・ゴコ県モルンドゥ郡ドンゴ村（Village de Ndongo, Sous-préfecture de Moloundou, Département de Boumba et Ngoko, Province de l'Est, République de Cameroun、北緯2° 6'、東経14° 54'、図1）周辺に居住するバカを対象と

して1999年2-3月および2000年8-10月に現地調査をおこなった。ドンゴ村の平均気温は24-26℃で年較差は小さく、一年を通して朝は20℃程度、日中は晴れると30℃程度まで気温が上がる。平均年間降水量は1600-1800mmである。この地域には、大雨季(8-11月)、大乾季(12-3月)、小雨季(4-6月)、小乾季(7-8月)の4つの季節がある(林, 2000)。

ドンゴ村そのものはバベレ⁹⁾というバントゥ A グループの言語を話す農耕民の村で、彼らの人口は70人程度である。ドンゴ村周辺には合計5つのバカの定住集落があり、その総人口は250人程度にのぼる(林, 2000)。私はその定住集落のうちの1つであるバカ・アン(Bakun⁹⁾)に滞在して彼らの畑や農耕、農作物の利用について観察および聞き込みをおこなった。この地域にはバカとバベレ以外に、1970-80年代に移住してきたバンガンドやカメルーン北部からやってきたハウサ(Hausa)の人たちも数家族居住している。ハウサの人たちは彼ら自身で焼畑とカカオ畑を保有しているが、それに加えて店を構えて商売をおこない、塩、砂糖、サンダル、布、山刀など日用雑貨を販売している。彼らは次の述べる木材伐採会社の進出に際して移住してきた人たちである。

1973年以前、ドンゴ村には車が通行可能な道路は存在せず、県都モルンドゥに行くためには農耕民は主としてカヌー、バカは徒歩で移動していたと思われる。ドンゴ村はモルンドゥから見るとジャー(Dja)川最奥の村であった。

1973年、この村に木材伐採会社が進出し貯木場が作られた(林, 2000)。これにより、村に通じる道路や橋などが整備され交通の便が良くなるとともに、外部から労働者が多数やってきた。ドンゴ村には今の何倍もの人が住むようになり、車による行き来も増え、たくさんの現金が村に落とされた。バカの中にも木材伐採会社に雇われていた人たちが存在した。この時期にバカは現金を用いた生活にかなり慣れたと想像される。

木材伐採会社の進出から数年後に、ドンゴ村付近のバカは伐採や木材運搬用に造られた道路沿いに出てきて定住集落を作った。この集落が現在まで続いている。バカはこの道沿いの集落に出てくる前にすでにバナナ栽培を中心とした焼畑農耕をおこなっていた。新しい集落でもそのまわりで焼畑農耕をおこなった。

1982年に木材伐採会社は撤退し、村の状況は変化する(林, 2000)。ドンゴ村は再び小さな村に徐々に戻り、道路の手入れがおこなわれなくなり、橋も落ちたままで車による交通が途絶えた。つまり、ドンゴ村は再びこの地域で最も交通の不便な地域に戻ったわけである。実際、私が1999年および2000年に調査に入るときは、モルンドゥで船外機付きの船をチャーターし、ジャー川を8時間かけてさかのぼった。ただし、2001年には落ちていた橋が修理され、再び車で直接ドンゴ村まで行くことができるようになった(佐藤, 私信)。

地方政府によるバカに対する農業指導はこの最奥の村においてもおこなわれていた。昔のものについては記憶がなかったが、1990年代前半におこなわれたものについてはバカが覚えていた。モルンドゥから派遣された役人(民族はバンガンド)が集落の道をはさんだ反対側に個人

ごとに境界をきちんと作って、集落の全世帯に畑を作らせたという。このような指導（もしくは強制）は1950年代から断続的におこなわれていたと思われる。

現在のバカの生活は定住集落での生活と森のキャンプでの生活に大きく分けられる。定住集落の生活では、自分の畑から得られる農作物が最も重要な食料源あり、その中で最も多く栽培されているのがバナナである。これについては、後で詳しく述べる。農作物には自給用のものばかりではなく、カカオとコーヒーといった商品作物もあるが、ドンゴ村付近のバカではコーヒーの栽培はほぼ失敗に終わり、カカオが盛んに栽培されている。

バカの定住集落でのもう1つの仕事は農耕民やハウサの畑仕事の手伝いである。この仕事に対する見返りは一応1日250 CFAフラン⁶⁾と決められている。ただし、実際には農耕民の場合は彼らがトウモロコシとキャッサバから作った蒸留酒250 CFAフラン分(500 cc)を与えたり、ハウサの場合は数日分の働きの見返りとしてサンダルや服、布などを与えることもある。また、特に女性に対しては、農作物そのものを与える場合もよく見られる。たとえ、現金で支払ったとしても、多くの場合、すぐに酒を買って他のバカといっしょに飲んでしまい、現金はなくなっているようである。

バカは一年中定住して農耕をしているわけではなく、年に数ヶ月間森に入るバカも多い。ただし、その期間と頻度には個人差がある一方(林, 2000)、年による違いも見られる。森での主要な生業活動は罾猟もしくは銃猟であることが多く、その場合は森の植物性食物も利用するが、定住集落から森に料理用バナナやキャッサバなどの農作物を大量に持ち込んでいる。2000年8-10月に私がドンゴ村に滞在した期間では、イルヴィンギア(*Irvingia*)属のナッツが大量に森に実り、多くのバカがそれを求めて数ヶ月間森に滞在するということが見られた。このように、バカの生活はその年の森の野生動植物の状況によって変化する。

3. バカの焼畑農耕

先に述べたように、バカは1950年代から徐々に定住化をし、自分の畑を持つようになっていった。しかし、彼らはそれ以前から近隣の農耕民の農作業を手伝っていたため、焼畑農耕のやり方自体は知っていた。その農耕民の農法をバカは取り入れたので、基本的な農法は近隣の農耕民とほとんど違いはない。つまり、農耕の技術的な側面に狩猟採集民の特徴が現れているわけではない。

まず、バカが理想とする焼畑農耕のやり方、つまり、バカに焼畑農耕のやり方を説明させたときにどのように説明するのかということを示そう。実際には必ずしもこのとおりになるわけではない。

まず、大乾季に一次林(*bele*⁷⁾)もしくは二次林(*wundo*)を伐採する。そして、大乾季の終わりに乾燥した木や草に火をつける。伐採と火入れは基本的に男性の仕事であるが、下生えを切り開く作業は女性もおこなう。火入れ前後に最初の植付けがなされる。植付けは女性の仕

事である。植え付けられる主要な作物は料理用バナナ、生食用バナナ、ココヤム、キャッサバ、トウモロコシ、タバコなどである。トウモロコシの植付けはいつせいにおこなわれるが、バナナの植付けは断続的に2年間程度、ココヤム、キャッサバの植付けは1年間程度継続する。植付け後は男女とも除草をおこなう。肥料などはまったく与えない。収穫は女性の仕事である。トウモロコシの収穫がもっとも早く、植付けから3カ月後に収穫される。ココヤムは9ヶ月、キャッサバは1年程度で収穫が可能になり継続的に収穫される。バナナは早い品種で1年、遅い品種で2年、多くの品種では1年数か月程度で収穫される。バナナは、収穫後もう一度除草をして植えられる。そしてもう一度収穫される。森の伐採から3、4年経過すると畑は手入れされなくなり、5年程度経つと草本や幼木に覆われた中に残された吸芽から成長したバナナが散見されるが、これは貧弱な実しかつげず、食用になることはあまりない。現在バカ・アンの新しい畑は二回目の伐採の場合が多いことから、15年から20年程度の休閑期間をおき、再び切り開かれて畑となっていることがわかる。

なお、以前から一部の畑でカカオが植え付けられている。これは伐採後2年目くらいから植え付けられる。カカオを植えた畑はバナナの収穫後も継続的に除草をおこない、カカオ畑へと成長していく。ただし、私はカカオの収穫時期に調査をおこなっていないので、カカオ栽培に関するデータは著しく欠けている。このため、カカオ栽培の分析は本稿ではおこなわない。今後の課題としたい。

実際のバカの農耕は必ずしもこのように進むわけではなく、時に非常に「いいかげん」にやっているように見えることがある。具体的にはこれから細かな分析の中で述べていくが、私たちの一般的な農耕のイメージからみた彼らの「いいかげんさ」が「狩猟採集民の農耕」の特徴なのである。

表1. バカ・アン各世帯の畑の面積

世帯	M1 ¹	M2	M3	M4	M5	M6	M7	M8	M9	M10	M11
面積 (ha)	0.25	?? ²	0.21	0.30	0.16	0.33	0.17	0.28	0.18	0	0
世帯	M12	M13	M14	M15	M16	M17	M18	M19	M20	M21	M22
面積 (ha)	0.32	0.31	0.23	0.05	0.12	0.19	0.12	0	0.23	?	0.03
世帯	M23	M24	M25	M26	M27	M28	F1 ¹	F2	平均 ³	標準偏差 ³	
面積 (ha)	0	0	0.18	0.35	0.29	0.15	0.03	0.09	0.20	0.10	

1: Mは成人男性と成人女性からなる世帯、Fは夫と離別した女性の世帯。

2: ?は畑の有無を確認できなかった世帯。

3: 畑を持たない世帯を除いて平均値および標準偏差を計算した。

まず、毎年すべてのバカが畑を切り開くわけではない。私が調査をおこなったバカ・アンには2000年の調査時に28人の既婚男性が存在し、2名については確認できなかったが、26人中2000年の大乾季に畑を開いたのは21人で、残りの5人、つまりほぼ5分の1の男性は畑を開いていない(表1)。畑を開かなかった理由は、彼らが伐採時期に森もしくは離れた他の集落に滞在していたことである。

バカは一次林を切ったほうがよりたくさんバナナを収穫できると考えているが、実際には21人中3人の男性しか一次林を伐採しなかった。それは一次林には二次林よりも大きくて硬い木が多いためであるという。彼らは一次林を切る男性を強い男だと評価している。また、畑には切り残された大きな木が存在するのが一般的である。これは近隣の農耕民にも共通する点であるが(小松・埴, 2000)、バカの畑のほうがより多く残されているように思われる。

私はバカ・アンの人々が2000年の大乾季に開いたほぼすべての畑23筆の面積を測った(表1)。21人の既婚男性が開いたものに加え、夫と離別した女性が彼女自身で開いた畑が2筆含まれている。面積の平均はほぼ0.2haで、最大が0.35ha、最小が0.03haであった。0.1ha未満の畑は4筆存在したが、そのうち2筆は夫と離別した女性の畑、1筆は畑を開いている途中でその男性が死亡してしまったもの、残りの1筆は伐採の途中で隣国のコンゴに訪問に行った男性の畑である。

当然のことではあるが、伐採には男性の労働力が重要で、それが調達できないと十分な面積の畑は作れない。離婚した女性の畑は前回の伐採から5年程度しか経っていない場所を伐採したものである。女性は斧で太い木を切り倒すことができないので、山刀で下生えを切るだけでよい場所に作ったのであるが、面積が小さいうえ、休閑期間が短いので収穫量はかなり少なくなるのではないかと予想される。ただし、このために彼女が飢えてしまうというわけではない。彼女は農耕民の農作業の手伝いなどで農作物を手に入れることができるうえ、近くに住むバカから無償で食物分配を受けることもできる(Kitanishi, 2000)。この点については伐採をしなかった世帯でも同じことが言える。

大乾季はまた近隣の農耕民の畑の伐採時期でもある。バカは農耕民の畑を開く作業を手伝うと酒や現金(現金は大部分が酒になるのだから結局は同じだが)をもらえる(ハウサの畑の場合はサンダルや布なども)。バカの中にはこれらのものに惹かれて自分自身の畑を開く作業が疎かになる者もいる。畑の面積の標準偏差が大きいことからわかるように、畑の面積にはかなりばらつきが見られる(表1)。これはたとえ伐採時期に集落に滞在していたとしても、どれだけ自分の畑に集中して伐採をおこなうかということに個人差が存在することを意味する。大乾季に十分な畑を開けなかったバカの中には雨季に入って以降もずるずると畑を切りつづける者や小乾季に畑を新たに開く者もいる。

最初に植え付けられるのはバナナである。しかし、他の作物の植付けの順番は決まっていないうようである。私には時間があるときに気が向いたものを植え付けているように感じられた。

各作物の栽植密度を調べるために、伐採してから半年程度経った21筆の畑について10m×10mのコドラートをとって、植えられている作物をすべて数えた。私は面積を測った23筆の畑すべてでコドラートをとるつもりであったが、2つの畑ではまだほとんど植付けがおこなわれていなかったため、省略した。つまり、畑を開いたにもかかわらず、半年が経過してもほとんど植付けされていない畑が存在するということである。これは、伐採後に森に入ったり他の村を訪問したりしたため集落にほとんど滞在していなかったことが原因である。伐採作業が無駄になっていると言ってもよいだろう。

伐採してから半年くらいの畑では、よく植えられている場所とほとんど植えられていない場所が存在することが多い。そのため、畑のどこでコドラートをとるかによって栽植密度が大きく違ってくるのであるが、あまり植わっていないところには今後植えられる可能性があると考えて、一番よく植えられているところで調査をした。

表2. 各作物の植えられている畑の数、栽植密度の平均値、標準偏差

作物	バナナ	トウモロコシ	キャッサバ	ココヤム	タバコ	カカオ
畑の数 ¹	21	15	13	15	9	2
栽植密度(／ha) ²	1310	-	923	933	822	550
標準偏差	400	-	896	672	583	354

作物	パイナップル	栽培用ヤム	サトウキビ	オクラ	トウガラシ*	パパイヤ*	ndaka* ³
畑の数	1	1	1	1	6	10	4
栽植密度(／ha)	450	100	100	100	167	490	250
標準偏差	-	-	-	-	121	451	173

1: 21の畑のうちでその作物が観察された畑の数。

2: その作物が植えられている畑における栽植密度の平均値。

3: ナス科の植物 *Solanum* sp. で、これにトウガラシと塩を加えて煮込みスープを作る。朝食でよく食べる (小松, 1996)。

*: この3つの作物はバカが播種するのではない。バカが無意識的に種を散布していると思われる。

バナナは21筆の畑で植え付けられており、バナナ以外の作物のみが植え付けられている畑はない (表2)。さらに、バナナの栽植密度が最も高いことから、バカにとって最も重要な作物であるということがわかる。ただし、畑の一部のみにバナナが植えられている場合がほとんどであった。バナナは断続的に植えられる傾向にあるが、植える時期を少しずつずらすことにより、収穫時期も少しずつずれ、一年中収穫が可能になっている。バナナは収穫した実を長期間保存できないので、これは有効な方法であると思われる。ただし、こう考えると伐採から半年

後には畑のほぼ半分にはバナナが植えられていて当然であるが、そのような畑は少なく、逆にごく一部にしか植えられていない畑が多い。ということはやはり手を抜いている部分があるということだろう。また、1999年の調査では伐採から一年経った畑をいくつか観察したが、きちんと植えている場所とそうでない場所が存在した。

バナナの次に重要な作物はトウモロコシ⁸⁾、キャッサバ、ココヤムで、ほぼ3分の2の畑で植付けされている(表2)。しかし、これは逆にいえば3分の1の畑で植えられていないということである。また、キャッサバとココヤムの栽植密度の標準偏差が大きいことからわかるように、畑の中で最も高密度で植えられている場所を選んだとしても、まばらにしか植えていない畑がかなりある。

伐採後半年が経過しているにもかかわらず、このようにバナナ、キャッサバ、ココヤムの植付けが不十分なのは、やはりバカが森に入ったり他の村に訪問したりということで集落にいない時期があったことや、農耕民の農作業の手伝いばかりをしていることが理由としてあげられる。あるバカの男性は「バカの女性は酒や服のために自分の畑ではなく農耕民やハウサの仕事ばかりしている。」と嘆いていた。

植付け後の草刈りもあまり熱心ではない。一部には作物が雑草の中に埋もれてしまっているような畑もある。私は植付けの調査時に、立ち枯れたトウモロコシや、実をつけてもちゃんと種の入っていないトウモロコシが放置されているのを多くの畑で見かけた。2000年の小雨季と小乾季に森でイルヴィンギア・ナッツが大量に実をつけたため、ドンゴ村周辺のバカの多くはこれを採集するために長期間森に入っていた。そのため、トウモロコシの世話をほとんどおこなわなかったのである。トウモロコシは生長期間が短く、また日光を必要とするので、その時期にきちんと世話をする必要がある。

一方、バナナは雑草に強く、日光もトウモロコシほど必要としない。また、バナナは収穫までの期間が長い。バナナは雑草に埋もれてしまったとしてもそれで枯れてしまうのではなく生き続けることができる。そして、バカがいつか時間を見つけたときに草刈りをすれば、それで何とか生長して収穫が可能になる。バナナが常に世話をし続けないといけない作物ではなく、手間のかからない作物であることが、「いいかげんな」バカの農耕に適した性質となっている。

4. 考察：農耕を受け入れた狩猟採集民バカ

(1) 即時的収益システムと遅延的収益システム

バカが自分自身の畑を持つようになってからはほぼ40年が経過している。つまり、バカはそれまで彼ら自身の畑を持たなかったわけである。どうして、彼らは政府によって強制もしくは指導されるまで自分の畑を持たなかったのであろうか。別の言い方をすれば、バカが自分の畑で農耕を始めるにあたって最も問題になったのは何であらうか。

それは農耕の技術ではない。バカは農耕民の農作業の手伝いを以前からおこなっていたは

ずで、焼畑農耕の技術をすでに知っていたと思われる。実際、現在おこなっている彼らの農法は近隣の農耕民のものとはほぼ同じである。土地がなかったわけでもない。農耕民が利用していない土地はたくさんあったはずで、現在バカはいろんところで畑を作っている。

私の考えでは、農耕化において最も問題になったのは彼らの生業活動が即時的収益システム (immediate-return system) から遅延的収益システム (delayed-return system) へと変化しなければいけなかったことである。この用語は Woodburn (1982) において詳しく説明されている。即時的収益システムとは労働からの見返りが直接のおよび即時的に獲得できるような経済システムのことであり、これは狩猟採集に典型的に見られるもので、狩猟採集に出かけたらその日にその労働の成果である肉やイモなどを手に入れて食べることができる。つまり、1日1日が単位であるような経済システムである。「その日暮らし」の原則と呼ばれることもある (黒田他, 1987)。遅延的収益システムは投下した労働による収益が数ヶ月もしくは数年後に得られるような経済システムであり、奴隷労働や賃労働を除いた農耕や牧畜などに典型的に見られる (Woodburn, 1982)。焼畑農耕なら、森の伐採もしくは植付けといった作業をしたとしても、その結果としてその日に収穫があるわけではなく、数ヶ月もしくは一年以上後でその労働の成果を手に入れることができる。

即時的収益システムの特徴は、あるときにおこなう生業活動がその過去や未来に左右されないということにある。つまり、その時点のみの状況に合わせて生業活動がおこなわれる。例えば狩猟採集なら、そのときに最も多くある野生動植物資源をそれが最も多くある場所に移動してそれを利用するということである。

アフリカ熱帯雨林地域において、野生動植物資源には季節的で毎年経験からある程度予測が可能な変動もあるが、年による当たり外れといった、年による変動も存在する。例えば、イルヴィンギア・ナッツ、ハチミツ、イモムシなどで年による大きな変動が見られる (Kitanishi, 1995)。この年による変動は森に対して深い知識を持っているピグミーにも予想がつかないものである。狩猟採集を主要な生業活動にしている (いた) 人たちはそのような変動に合わせて移動しながら生活をしている (いた)。この場合、数ヶ月後もしくは一年後に自分がどこで何をしているのかということは彼ら自身まったく予想のつかないことである。そうすると、狩猟採集活動を維持しながら数ヶ月先まで縛られる形で農耕をおこなうのは困難である。

(2) 農耕民の農作業の手伝い

ピグミーによる農耕民の農作業の手伝いは労働力と農作物の交換という点でピグミーと農耕民の共生の仕組みの1つと捉えられることがある (寺嶋, 1997; 竹内, 2001)。これはこれで正しいのだが、即時的収益システム (狩猟採集) を主としておこなっているピグミーがいかんにか遅延的収益システム (農耕) に参加するかという視点からみれば、両者の間の共生関

係が単なる労働力と農作物の交換ではないことがわかる。つまり、ピグミーにとっては農耕民が畑を一年中管理してくれるからこそ、野生動植物資源の状態に合わせて長期間森に入ったとしても、村に戻ってきたときに農作物を利用することができたのである。

バカを含むピグミーは自分の畑を持つ以前から現在にいたるまで農耕民の農作業の手伝いを長くおこなってきた。その見返りは働いたその日に農耕民から酒、タバコ、農作物もしくは食事の提供を受けるというものである。彼らはいくまでも即時的収益システムの枠の中で農作業をおこなっていたということになる。つまり、本来は遅延的収益システムである農耕に1日1日を単位とする即時的収益システムとして従事していたのである。即時的収益システムをとっている（とっていた）ピグミーにとって、農耕民とは、生態学的に見れば、遅延的収益システムであるはずの農耕を即時的収益システムに変換する「道具」であり、これにより狩猟採集と農作業を両立できるようにしていたといえるのかもしれない⁹⁾。

(3) 政府による農耕の強制もしくは指導の持つ意味

バカにおいては、政府の定住化、農耕化政策によって外から強制される形で自分の畑における農耕が始まった。これはバカ自身が最初から最後までその畑にかかわり、その結果、畑の作物をすべて手にするという遅延的収益システムとしての農耕である。つまり、畑を開いたり、植付けをしたり、除草をしたりした日では、働いたにもかかわらず何も見返りが無いということになった（収穫を除いて）。数カ月後もしくは数年後のことを見越して働くということに慣れ親しんでいなかったバカにとって、これは、少なくとも最初は、外からの強制がなければ難しいことだったに違いない。

政府による強制がバカの農耕化に及ぼした影響はこれだけではない。政府による強制は集団全体が一斉に農耕を始めることを可能にし、これが農耕化を容易にしたと思われる。それ以前にもバカの間で個人的に農耕を試みようとした人がいたかもしれない。その人たちが農耕を継続できなかった理由としては、バカによる「盗み」と食物分配が考えられる。ピグミーが農耕民の畑から農作物を「盗む¹⁰⁾」ということは広く見られる（市川, 1982; 寺嶋, 1998; 竹内, 2001）。この「盗み」が農耕民に見つかり農耕民に罰せられることもある。一方、バカが他のバカの畑から農作物を盗むことがあるが、見つかったとしても罰せられることはない。また、バカにおける食物分配は現在よりも狩猟採集に依存していた時期のほうが盛んであったと思われる（Kitanishi, 2000）。このため、最初に農耕を始めた一部のバカが収穫した農作物をすべて自分自身で食べることは考えにくい。一部のバカだけが農耕を始めたとしても、その長期間にわたる農作業の見返りは集団全体にわたってしまうのである。これでは、個人的に農耕を始める気にはなかなかならない。

1950年代に政府が具体的に何をおこなったかは不明であるが、1990年代前半におこなわれた地方政府によるバカへの農耕の「指導」では、集落の全世帯にそれぞれ畑を開く場所を決

めて全員に農耕をおこなわせている。こうなれば「盗み」や「食物分配」はお互い様ということになり、農耕の支障とはならない。このような面でも政府による強制はバカの農耕化に大きな影響を与えたと思われる。即時的収益システムをとる狩猟採集民社会は「平等社会」と言われ、集団全体に対して強制力を及ぼすような長が存在しないとされている(Woodburn, 1982)。バカにもこれは当てはまる。このため、バカ自身では集団全体で一致して農耕を始めるということが難しかったと思われる。

(4) 即時的収益システムの面を含んだバカの農耕

バカが自分の畑を持つようになって40年程度経っているが、彼らの生業活動は完全に遅延的収益システムへと変化したわけではない。狩猟採集も一時的ではあるが依然として継続している。彼らの農耕、つまり「狩猟採集民の農耕」もそれからの影響を強く受けたものとなっている。

バカは過去に注ぎ込んだ労働が無駄になってしまうことをあまり問題としていないように思われる。先に述べたように、2000年の小雨季から小乾季にかけてイルヴィンギア・ナッツが大量に実り、多くのバカが定住集落を離れて森の中でナッツの採集に専念していた。その結果として、その年に植えたトウモロコシを収穫できなかった。彼らにとってはトウモロコシよりも森のナッツのほうが魅力的であったのだろう。畑を開いたにもかかわらずまったく、もしくはほんの一部しか植付けをしていないという場合でも、伐採作業がまったく無駄になっている。

遅延的収益システムでは過去の労働の蓄積が未来の大きな収益に結びつくが、即時的収益システムでは道具の製作などわずかな部分を除けば労働の蓄積はほとんどないといってよい。この点からみると、過去の労働の蓄積を無駄にすることは常に現在のことを考える即時的収益システムと結びついていることになる。別の言い方をすれば将来の大きな利益よりも目先の利益に惹かれるということである。先にバカの男性が、「バカの女性は自分の畑ではなく農耕民の仕事ばかりしている。」と嘆いたことを紹介した。彼ら自身でも自分の畑の仕事をしたほうが将来の大きな収穫を手にするができることをわかっているのだろうが、目先の酒や食物のほうを選択してしまうのである。

その結果、バカの農作業は計画性のない、行き当たりばったりのものになる。一般的に農耕には農耕歴があり、一年のこの時期にはこの作業をするということがある程度決まっているもののはずだが、それがバカにはなかなか通用しない。自分の畑における農作業は森の野生動植物資源の状況や、近隣の農耕民の農作業の都合、さらにはバカの個人的な事情(例えば、男性が結婚相手を探しに出かけ、長期間定住集落から離れるなど)に合わせて変化していくものになる。

(5) 即時的収益システムに適した作物：バナナとキャッサバ

このような特徴を持つ彼らの農耕にとってバナナは非常に適した作物である。バナナはある決まった時期に必ず農作業をしないといけないという作物ではなく、時間の空いたときもしくは気のむいたときに農作業をおこなえば何とかなるという性質を持つ作物である。

農耕民はバナナを中心とした混作畑の他に、落花生の単作畑やココヤム、キャッサバ、トウモロコシのみが植えられた畑を持っている。これらの畑に木はなく、日光が十分に当たるようになっている。農耕民は農耕民自身とバカの労働力を利用してこれらの畑の除草をきちんとおこなっている。特に落花生は短期間に生長するが、その時期に十分な日光に当てる必要がある。このような畑は伐採会社の跡地でもともと木が切られて草地となっているところで作られている。バカはこのような畑で手伝いをしており、落花生を報酬としてもらうこともある。

バカ・アンの男性の畑で一度だけ昔の落花生の畑と紹介された畑（その時点ではココヤムとキャッサバの畑）を観察したことがあるが、落花生の畑はそれのみである。必ずその時期にきちんと除草をする必要がある落花生の栽培は失敗する場合もかなりあるだろう。それが普及の障害になっていると思われる。ドンゴ村から北150kmに位置するベソン（Beson）村においてバカの畑を見せてもらったとき、バナナなどの混作畑に植えられた落花生が日光が不十分なため枯れてしまったので、畑の持ち主であるバカの男性がその枯れた落花生を引き抜いていた。トウモロコシや落花生はバカが実際に植えているのだからうまく収穫できる場合も時にはあるのだろうが、いつも確実にそうであるわけではない。一方、バナナは手を抜く時期があってもほぼ確実に育つ作物である。バカは近隣の農耕民の農耕を取り入れたのであるが、そのすべてがうまくいくわけではない。また、その普及の程度も作物によって異なる。ただし、失敗しても後悔しないというところが、即時的収益システム的な面をもつ農耕をおこなうバカらしいと言える。

カメルーン南東部全体でバカの農耕を見ると、すべての地域でバナナが主要な作物であるというわけではない。現在、バカは北のほうの森と草原の境界近くまで進出している。そのような場所では、キャッサバが主要な作物となっている。両者の違いは、キャッサバはバナナよりも乾燥に強いが、バナナに比べて日光が必要であるという点である。そのため、キャッサバの焼畑はバナナの焼畑に比べて木をきちんと切る必要がある。だから、森の発達している場所では木を切る作業が重労働となるため、バナナを主とした農耕がおこなわれている。一方、森と草原の境界近くでは木を切る作業はそれほどたいへんではなく、より乾燥しているということもあり、キャッサバが主になっているのだろう。

バナナとキャッサバに共通な点は継続的な手入れを必ずしも必要としないということである。両者とも雑草に簡単には負けない。この両者の性質がバカにとって受け入れやすい作物となっている理由の1つである。

もう1つ両者に共通することは、収穫物をあまり保存しないということである。これは狩猟採集による産物とも共通している。この特徴をより明確にするために、穀物栽培と比較してみよう。穀物栽培では収穫期が決まっており、そのときに収穫したものを次の収穫期まで貯蔵してそれを食いつないでいかなければならない。また、次の植付けのためにも種子を保存しておく必要がある。つまり、穀物栽培では畑での作業が遅延的収益システムになっているだけでなく、収穫後にも先のことを考えて保存をしなければならない。これからすると、穀物栽培は二重の意味で遅延的収益システムである。

一方、バナナやキャッサバは畑での農作業は確かに遅延的収益システムであるが、収穫後には加工や調理をして食べるだけである。両者には穀物のような明確な収穫期が存在しない。例えばバナナの場合、一年を通じて収穫できるように、生育期間の異なる品種を植えるとともに、植付けも数ヶ月にわたってもしくは定住集落に滞在している間中おこなわれる。キャッサバはイモを地中に「保存」できる。つまり、収穫せずにおいても腐ったりはしないので一度イモをつければ好きなときに収穫できる。また、バナナとキャッサバは栄養体繁殖であるので種子を保存する必要はない。

ドンゴにおいてもトウモロコシや落花生のように種子繁殖をする作物が栽培されている。バカがそれらの作物の栽培に失敗することがあることはすでに述べたが、これらの栽培にはもう1つ問題がある。それは播種用の種子の保存である。バカは収穫物をすべて食べてしまうことが多いので、なかなか種子を保存できず、植付けの時期になると近隣の農耕民に種子を分けてもらいに行くことになってしまう。つまり、これらの作物の栽培は現在のところ近隣の農耕民なしには成立しえないものとなっている。

今後、ドンゴのバカは遅延的収益システムによりなじんでいくのだろうか。これについて確定的なことはいえないがその可能性は高いと思われる。70年代から80年代にかけての伐採会社における賃労働では、月に一度の給料が支払われていた。この場合、労働の見返りが長くても一カ月後になるということであるが、実際には、現在のバカから推測すると、前借りをしたり、商人から付けで買い物をしていたと思われるので、完全に遅延的収益システムにはなっていなかっただろう。しかし、労働とその見返りに時間差があるということになじんでいくには重要な機会であったと思われる。現在では一部の、特に若いバカが、ハウサの畑で数十日間働いた見返りとして現金や服、サンダルをもらうことがある（林，2000）。これは自分自身の畑でおこなう農耕ではないが数十日という単位で遅延的収益システムを受け入れていることになる。このように、個人差が存在しつつも、全体としては遅延的収益システムをより受け入れる方向に進んでいると思われる。この彼らの経済の現在における変化については別稿を準備中である。

(6) 狩猟採集民における農耕化のあり方

最後に、このバカにおける農耕の受容をもとに、人類が農耕を発明した、もしくは伝播してきた農耕を受け入れていったときの状況を考えてみよう。まず、農耕直前の社会が世界全体でみると同じ社会ではなかったことを思い起こさなければならない。テスタール (1982) は狩猟採集民社会を定住し食料を備蓄する社会と、移動し食料を備蓄しない社会に分けた。前者に典型的なのはアメリカ北西岸やシベリア南東部 (北海道のアイヌを含む) など季節的に大量の漁獲をもたらす漁撈活動を中心とする人たちで、後者はピグミー (少なくとも農耕化以前の) や南部アフリカのサンである。定住し、食料を備蓄する狩猟採集民はすでに遅延的収益システムを受け入れている人たちである (Woodburn, 1982)。

近東で最初に野生の麦を栽培化したとされる人たちは、それ以前に野生の麦を季節的に大量に採集し、それを貯蔵して定住生活を送っていたと考えられている (テスタール, 1982)。遠い将来を考えた上で現在の行動を決めるということ、つまり収穫後における遅延的収益システムが農耕以前におこなわれていたのである。そこからならば、農耕の技術的な問題が解決されれば、社会的にはスムーズに麦を利用した農耕へと移行していくことができたであろう¹⁴⁾。テスタール (1982) は野生の麦を栽培化したことよりも野生の麦を貯蔵し定住生活をおこなったことのほうが社会的な変化において大きな意味を持っていたと考えている。

一方、熱帯地域の多くでは備蓄し定住する狩猟採集民が農耕化したのではなく、即時的収益システムをとっている狩猟採集民が農耕を始めたのである。東南アジアにおいて定住集落が作られるのは農耕がその地に登場したはるか後のこととされている (テスタール, 1982)。サウアー (1969) は東南アジアを農耕の起源地であると考え、その最初の農作物としてバナナ、タロ、ヤム、サゴヤシなどをあげている。これらが世界で最も古く栽培化された作物かどうかはわからないが、少なくとも東南アジアにおいて最も古くから栽培されてきた作物ではあるだろう。バカにおけるバナナもしくはキャッサバと同じように、即時的収益システムをとっていた人たちにとって、これらの作物は受け入れやすいものであったに違いない。

狩猟採集民が農耕を受け入れる場合、その受け入れ方はその狩猟採集民社会の経済・社会システムによって影響を受ける。大きく見るとそれは遅延的収益システムを持つ狩猟採集民と即時的収益システムを持つ狩猟採集民に分けることができるだろう。バカの事例は即時的収益システムを持つ狩猟採集民が農耕化した過程について考える材料になるに違いない。

謝 辞

本研究は、文部省科学研究補助金 (生活環境としてのアフリカ熱帯雨林に関する人類学的研究、課題番号12371004) によっておこなわれた調査を元に行っている。研究代表者である京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の市川光雄教授には調査隊に加えていただき、また調査のアレンジなどでお世話になった。同じく木村大治助教授と平澤綾子氏とは一部現地調査をともに

こない、日常生活の面でもお世話になった。浜松医科大学の佐藤弘明教授はドンゴ村での調査の先駆者であり、さまざまな情報をいただいた。調査許可の取得にあたってはカメルーン科学技術研究省のタンチュー氏とシェ氏にご助力をいただいた。インフォーマントであり私のドンゴにおける日常生活を支えてくれたガスパール・メナタ氏、サクー氏、ラポ・ヨンボ氏を始めとするドンゴ村のバカのみなさんおよびバペレのみなさんには私の調査を受け入れてもらい、農耕についてのさまざまな情報をいただいた。本稿は民族自然誌研究会第26回例会「バナナ文化史研究の提唱—アフリカへの伝播と在来文化の創出」における発表に基づいている。またバナナの足研究会のメンバーであるである埜狼星氏、小松かおり氏、丸尾聡氏からは貴重なご意見をいただいた。これらの方々に心から謝意を表したい。

注

- 1) しかし、1990年前後には、ピグミーがアフリカ熱帯雨林の先住民であることや、すべてのピグミーが共通の起源をもっていることについて疑問が投げかけられた (Bailey et. al., 1989)。これには熱帯雨林の野生動植物資源だけでは十分なエネルギーを得られないということが根拠としてあげられていた (Headland & Bailey, 1991)。しかし、Bahuchet et. al. (1991) は野生動植物のみに依存して生活が可能である程度の潜在的資源が西コンゴ盆地において存在することを明らかにした。私がコンゴ共和国のアカ・ピグミーについて調べたデータも (Kitanishi, 1995)、農作物なしで狩猟採集民がこの地域で生存可能であることを示唆している。よって、ピグミーがこの地域の先住民である可能性はかなり高い。ただし、局地的にはすでに農耕民が住んでいた所にピグミーがやってくるということは頻繁に起きたと思われる。言語などからバカの移住の歴史を再構成した Bahuchet (1993) によると、現在バカの住んでいる地域に彼らが移住して来たのはここ数百年のことである。
- 2) バントゥ系の人々は「人」を意味する「ntu」を共通の語根として持つことからバントゥ (Ba-ntu) と呼ばれており、数百の言語の種類があるとされる。現在では中央アフリカから東、南アフリカまでの広大な地域に分布している (Guthrie, 1967)。
- 3) カメルーンの独立は1960年である。
- 4) これまでバペレ (Bakpele) はバクウェレ (Bakwele) と表記されることが多かった (Joiris, 1993; 林, 2000)。しかし、ドンゴ村の人々自身は自分たちのことを Bakpele と呼び、ジャー (Dja) 川沿いの村でも二村を除き自称は Bakpele である。例外となる二村での自称は Bakwele であった。彼ら自身および周りの人々も Bakpele と Bakwele をまとめて1つの集団として認識している。この Dja 川沿いの民族のエスニック・アイデンティティについて明らかにするには、対岸のコンゴ共和国に住む人々を含めてさらなる調査をおこなう必要があるだろう。
- 5) この Baka はエスニック・グループ名の Baka ではなく、付近を流れる Baka 川からとった

ものである。un はフランス語で1を意味する。

- 6) 2000年において、100 CFA フランが1フランス・フラン（およそ16円）であった。
- 7) バカ語は斜体字であらわす。バカ語の母音は7つあるが、ここでは5つの母音で表記する。また、バカ語には3つのトーンが存在するがそれも省略した。バカ語については Brisson (1979) が詳しい。
- 8) トウモロコシは収穫時期が過ぎていたため栽植密度を測らなかった。
- 9) ピグミーが農耕による生産物を手に入れる方法は他にもある。その代表的なものは獣肉などの森の産物と農作物の交換である (Ichikawa, 1986; Bahuchet, 1990)。これも即時的収益システムをとるピグミーが遅延的収益システムの産物である農作物を利用する1つの方法であると考えてよいだろう。また、ここで取り上げたのは農耕民とピグミーの農作業における生態学的関係のみであり、社会的な関係について言及するのはこの論文で扱う範囲を超えている。
- 10) これを「盗み」とみなすのは農耕民のみでピグミーは盗みであるとは考えていない場合が多い。ピグミーは農耕民の畑で農作業をしていることに加え、その他の雑用もこなし、また森の産物を農耕民に与えているので、農耕民の農作物を「もらう」ことはかまわないというのがその理由である。
- 11) これは農耕の技術的な問題を軽視しているのではない。技術の発明は非常に重要な点である。ただし、バカもしくは他のピグミーの事例からわかるように、技術が発明されれば（もしくは伝播すれば）自動的に農耕化するというのではないということを述べている。

参考文献

- Althabe, G. 1965. Changements sociaux chez les Pygmées Baka de l'est Cameroun. *Cahiers d'Etudes Africaines*, 5 (20): 561-592.
- Bahuchet, S. 1985. *Les Pygmées Aka et la Forêt Centrafricaine*. Paris, SELAF.
- Bahuchet, S. 1990. Food sharing among the Pygmies of central Africa. *African Study Monographs*, 11 (1): 27-53.
- Bahuchet, S. 1992. *Dans la Forêt d'Afrique Centrale: les Pygmées Aka et Baka*. Paris, SELAF.
- Bahuchet, S. 1993. *La Rencontre des Agriculteurs: Les Pygmées parmi les peuples d'Afrique Centrale*. Paris, SELAF.
- Bahuchet, S. & H. Guillaume 1979. Relations entre chasseurs-collecteurs Pygmées et agriculteurs de la forêt du nord-ouest du bassin congolais. in (S. Bahuchet ed.) *Pygmées de Centrafrique: Ethnologie, Histoire et Linguistique*. Paris, SELAF.
- Bahuchet, S., D. Mckey, & I. de Garine 1991. Wild yam revisited: Is independence from agriculture possible for rain forest hunter-gatherers? *Human Ecology*, 19 (2):

- 213-243.
- Bailey, R. C., G. Head, M. Jenike, B. Owen, R. Rechtman & E. Zechenter 1989. Hunting and gathering in tropical rain forest: Is it possible? *American Anthropologist*, 91: 59-82.
- Brisson, R. 1979. *Petit Dictionnaire Baka-Français*, Douala, Centre Culturel du College Libermann.
- Guthrie, M. 1967. *Comparative Bantu*, 4 vols. Hants, Gregg Press.
- 林 浩治, 2000. 「カメルーン南東部バカ (Baka) の狩猟採集活動—その実態と今日的意義」『人間と文化』14: 27-38.
- Headland, T. N. & R. C. Bailey 1991. Introduction: Have hunter-gatherers ever lived in tropical rain forest independently of agriculture? *Human Ecology*, 19 (2):115-122.
- 市川光雄, 1982. 『森の狩猟民』人文書院.
- 市川光雄, 1991. 「ザイール、イトゥリ地方における物々交換と現金取引」谷 泰編『文化を読む』人文書院.
- 市川光雄, 1999. 「内陸アフリカの生態史」高谷好一 (編)『〈地域間研究〉の試み (上) —世界の中で地域をとらえる』p271-284, 京都大学学術出版会.
- Ichikawa, M. 1986. Ecological bases of symbiosis, territoriality and intra-band cooperation of the Mbuti Pygmies. *Sprache und Geschichte in Afrika* 7 (1):161-188.
- Joiris, D. V. 1993. Baka Pygmy hunting rituals in southern Cameroon: How to walk side by side with elephant. *Civilisation*, 31 (1-2): 51-81.
- Kitanishi, K. 1995. Seasonal changes in the subsistence activities and food intake of the Aka hunter-gatherers in northeastern Congo. *African Study Monographs*, 16 (2): 73-118.
- Kitanishi, K. 2000. The Aka and Baka: Food sharing among two central African hunter-gatherer groups. in (Wenzel, G. W., G. Hovelsrud-Broda & N. Kishigami eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-gatherers. Senri Ethnological Studies* 53: 149-169.
- 小松かおり・埴狼星, 2000. 「許容される野生植物—カメルーン東南部熱帯林の混作文化」『エコソフィア』6: 120-134.
- 黒田末寿・片山一道・市川光雄, 1987. 『人類の起源と進化』有斐閣.
- Sauer, C. O. 1969. *Agricultural Origins and Dispersals: the Domestication of Animals and Foodstuffs*. 2nd ed. (1981. 『農業の起源』(竹内常行・斎藤晃吉 訳) 古今書院.)
- 竹内 潔, 2001. 「「彼はゴリラになった」—狩猟採集民アカと近隣農耕民のアンビバレントな共生関係」市川光雄・佐藤弘明 (編)『講座生態人類学 2 森と人の共存世界』pp. 223-253.

寺嶋秀明, 1997. 『熱帯林の世界⑥ 共生の森』 東京大学出版会.

テスタール, A. 1982. *Les Chasseurs-Cueilleurs ou l' Origine des Inégalité.* (1995. 『新不平等起源論』 (山内昶 訳) 法政大学出版局.)

Wilkie, D. S. & Bryan Curran 1993. Historical trends in forager and farmer exchange in the Ituri Rain Forest of northeastern Zaire. *Human Ecology*, 21 (4): 389-417.

Woodburn, J. 1982. Egalitarian societies. *Man (N. S.)* 17(3): 431-451.